

パネルディスカッション 「景観の色彩から姫路のまちづくりを考える」

コーディネーター 藤本 英子 パネリスト 加藤 幸枝 土田 昌平 清元 秀泰



○藤本英子 こんにちは。ようこそお越しくださいました。藤本英子です。座らせていただきます。

今ご紹介がありましたけれども、私も36年ぐらいこの景観という分野に携わって参りました。そして姫路市の方もご縁をいただきまして、この数年景観広告物審議会委員を務めさせていただいております。

今日は景観賞を受賞された方々おめでとうございます。私も審査に寄せていただきながら現場を楽しませていただきました。加藤先生、本日はありがとうございます。

私は吉田慎吾先生も、学生時代から憧れておりましたし、色彩という分野では、ランクロさんのことを懐かしくパネルを見せていただいております。

景観は広い分野ですけれども、私も加藤先生も美術大学を出て、この分野に入っています。建築土木の方々は、工学部というところを卒業されて入られるのですが、まちの景観という分野を考えたとき、色彩の分野をちゃんとわかるのはこのデザインという分野卒業の人なんですよね。そういうところで、私もいつの間にか色彩の専門ということで動くことが多くなっています。

今日はこの辺りを交えながら、さらにお

話を深めていけたらと思います。

まず先ほど、最後に姫路の色彩という話がありましたけれども、この辺りについてもう一度、自己紹介も含めて加藤さんの方は追加でありましたらお話いただけたらと思います。

私も、今日シミュレーションされてましたけれども、やっぱり姫路城を白ということ強調したいがために、明度をコントロールし、他のビルを少し暗めに色をつけるというよりは、少し明度、明るさを落とすということで、随分象徴性が高まるなあということはずっと思っておりました。姫路の景観色彩について、改めてプラスアルファありますでしょうか。加藤さん、お願いします。

○加藤幸枝 そうですね、特に冒頭で町に対する気づかいが感じられるというお話をさせていただいたんですけども、やはりそれが公共のいろいろな表示にあらわれていると思いました。

例えば大手前通りの歩行者と自動車、自転車に分けるゾーンのサインであるとか、それから地下におりる駐車場の入口の周りですね、そういうところにもいろいろ、案内表示があるんですけども、ほとんどグレーの濃淡でまとめられていて、過度に色で誘導とか、注意を促そうとしていない。

ちゃんと考えて計画しないとできないことなので、携わる方々がそういう気づかいをされているんだなど。そこに歩道のところの、おそらく市民の皆さんが手入れされたお花が非常に綺麗に咲いている。その関係が印象的でした。

○藤本英子 お花の手入れは、民間の方々

が随分綺麗にされております。ありがとうございます。

それでは土田さん自己紹介を含めて、姫路の色彩についてお願いいたします。

○土田昌平 よろしく申し上げます。蒲田商店の土田と申します。

前職で日建設計というところにおりまして、このアクリエひめじの設計の担当をさせていただいておりました。

私自身は姫路の生まれで、Uターンをしてきた立場になります。今日、色のお話ということで、すごく難しいなと思い、同じく姫路にずっと住んでいる父に姫路の色とは何か聞いてみました。そしたら、いやそんなもん城の白と黒やろうみたいなことしか出てこなくて、僕も先生のお話をお伺いするまでは、どちらかというとか何か派手な色というか、そういうお話をされるのかなというのは思っていました。それで想像したときにやはり一番最初にぱっと浮かんだのは最近あったお祭りの時ですね。姫路の町が一番ワッと盛り上がるタイミングというのが、お祭りのタイミングで、町ごとにお神輿やシデ棒とってそれぞれの町が自分の色というのをもちで、その辺のシビックプライドというのか、そういう辺りとすごく密接に繋がっていて、しかもそれがいつもないというのか、その瞬間だけ現れる姫路の色という要素で、僕の中では最初に思い浮かんだ色でしたね。

他にも季節に応じた姫路城の桜の色や、圓教寺の紅葉の色とか、そういう季節と連動した色となると、姫路はこの色みたいなものは、城というイメージがあるので、少ないのかなと思っております。

○藤本英子 ありがとうございます。お祭りで、地区ごとで色が違うんですか。幾つぐらいあるんですかね。

○土田昌平 それはもう、エリアごとにこの町は黄色、この町はピンク、みたいな感じでそれが練り合わせをするので、色がぶ

つかり合うような印象になります。

○藤本英子 なるほど、あれですね今日、加藤先生のお話にありました、「地と図」じゃないですけど、「ハレとケ」ですね。

日常生活が「ケ」とすると、そういう「ハレ」のときには色を派手に使う感じなんですかね。ありがとうございます。今日はよろしくお願いいたします。

それでは、市長にお話をお伺いしたいのですが、今日表彰式のときの一言が、本当に景観を愛しておられるんだなというのをひしひしと感じたところですが、色に対してはいかがですか。

海外でお過ごしになった時期もおありになるということですので、客観的に見て日本のそして姫路の色はいかがでしょうか。

○清元秀泰 僕は20代から30代前半ずっとテキサスに住んでいたのですが、何となく原野の色みたいなのが多かったです。今回もヨーロッパに行って、やはり石畳が非常に強烈な印象があり、その地域で取れる石の色によって随分まちの雰囲気が違う。

その街全体が世界遺産になっている所は、レンガや屋根に統一性を持たせているので、そのあたりは都市国家として発展してきたヨーロッパの特徴なのかなと感じました。

一方で、姫路のことについて最近、特に感じたことは、ずっと姫路で生まれ育ったので姫路城については、先ほどおっしゃった、この色というイメージは、瓦の黒と白壁しかなかったのですが、実は3年前に、照明デザイナーの石井幹子さんに、LEDの照明をやりかえていただいて、天守閣から順次やっていった中で、昨年、石垣の照明もLED化をしました。

石井幹子さんは実は、皇居の石垣の照明もされていたのですが、私に興奮して電話をかけてこられて、実は皇居の堀と石垣をライトアップしても、全然良くなかったと。ところが姫路の石垣と水面に移る照明、そして後ろに控える天守閣をやってみて、初

めてわかりました。姫路の石垣の石の色は白い。

私も調べてみるとやはり、花崗岩でも、御影石であったり、このあたりの墓石に使われるような庵治石など、全体的に関西の石垣の色は白くて、夜に照明を当てるとより白さが際立つ。

一方、関東を中心とする、いわゆる大谷石に近い黒石は、光を当てると荘厳な感じはするけど、怖い感じがする。

そういうことで、石垣も含めた、水面の照明をやりかえていただいて、姫路城が美しく白い世界遺産だなということを改めて気づきましたと、石井幹子さんに言われて、夜になって行って見ますと、我々の、例えば、トランジットモールのところに引く石畳の舗装とかも、やはりその石垣に合わせて作っていくべきで、過度な黒いアスファルトは合わないなということを改めて思いました。

考えてみると、仙台に10年住んでたときに、仙台のお墓は真っ黒な石ばかりなんです。

関東から北側に行くと、石は黒いものというイメージがあるんですけど、関西の石はやはりグレーとか、白に近い灰色という意味で、都市計画にも取り入れていくべきではないかなと思いました。

○藤本英子 ありがとうございます。

思いがけないお話を伺えた気がします。

やはり関西は人間も明るいのは、そういうところも入っているのでしょうか。

皇居に勝った感じがしますね。

ぜひ22日から、夜間のライトアップのイベントもあるようですので、夜間景観という言い方をしますが、ぜひ皆さん確認に行っていただけたらと思います。

いろいろ、姫路の魅力をさらに聞いていただけたかと思うんですけども、もう少し今度は絞り込んで、姫路城周辺の大手前通りの景観についてお話をしていきたいと

思います。

先ほど加藤先生のシミュレーションにもありましたけれども、随分屋外広告物のコントロールを進めているところです。

できるだけ上の方には広告を入れないでね、色を抜いてね、そういうことになっているわけですが、やはり建築物、景観、そして屋外広告物景観というこの関係性が、まさにどう調和していくかというところが、大変重要なところだと最初のお話にもありましたが、姫路の素材色でイメージが浮かぶのは、白の漆喰というところが大きいかなと思います。瓦はちょっと黒くなってきたんでしょうか。できた頃は、瓦が前より白のではないかという話がありましたが、そのあたりこの通りに関して再度、加藤さん、いかがでしょうか。

どういうふうこれから目指していったらいいと思われませんか。

○加藤幸枝 全体で考えるということがすごく大事だと思っていて、ひとつのヒントになるのが「遠景」「中景」「近景」という距離に応じた、物や色の見え方、見せ方だと思うんですね。

ウォークアブルなまちということを考えていくときに、歩行者や歩行者の目線にとって、どこが優位でどこに色を持ってくるかみたいなことがあるといつも考えてるんですが、ずっと意識しているのが、自然界の色遣いの法則というのがあるって、何かそれに習うことが、私たちも自然の一部なので、違和感を感じにくいひとつじゃないか。

そういう何かというと、自然界の中で、鮮やかな色を持つものは、地表近くにあって、面積が小さいという、法則なんですね。

例えば自然界の中で頭上にすごい鮮やかな色がずっとあり続ける状態はなく、夕日とか鮮やかですけど、一瞬ですし、紅葉の時期も、鮮やかですけどあれも地表に落ちてしまいますよね。

目線から高い上の方に色とか、何か強烈

なものがずっとあり続けるということが、私たちのバイオリズムとはちょっと違うということ。

逆に、足元には動くものがいろいろあり、お店の何か演出が表出したり、動くサインがあったりみたいなこと、或いはさきほどのお祭りの色というのも、そういう要素だと思います。

うまく住み分けができるといいのではありませんかと常々思っています。

○藤本英子 ありがとうございます。住み分けですね。

結局大きな通りはそれなりにシンボルを作って、裏通りは楽しいものが、たくさん出てもいいんじゃないかという話かと思えます。ありがとうございます。

そういうところからすると土田さんがいろいろ仕掛けて活動されてるといふ噂を伺っておりますが、にぎわいというところを、「近景」で作るといふことかと思うのですが、いかがでしょうか。この活動をご紹介しますか。

○土田昌平 はい、ありがとうございます。私がやってるお店というのが、蒲田商店というお店で事業承継をして、生活道具のお店を引き継いでやっています。少し西側にある、大手前通りとは対照的なエリアで、もともと手柄の市場ができるずっと前の昭和のころに市場があった場所です。その営みをできるだけ引き継いで継承して、先ほどのお話でまさに近景だなと思っていて、市民の方のお声のように、すごく雑多なところがむしろ魅力です。

リノベーションの設計の仕事も時々やるのですが、依頼主と一緒に建物に入らせていただいたときに、この木の窓すごくいいですよとお話をしても、こんなん何がええんやみたいなことを大体皆さんおっしゃるんですよ。やはり認識の違いがすごくあり、能動的にこれが面白いということを見つけに行くような、そういう積極的な姿勢

みたいなものが、景観の認知というんですか、その部分にすごく関わるなんていうのを感じていて、これすごくいいですよと言ったら、結構皆さんまんざらじゃない顔をされるんですよ。

やはり嬉しいなというのがあり、そういうギャップを埋められるような、何かいいところを言い合うみたいな空気感が、景観を作る上でも重要な考え方ではないかなということを考えておりました。

○藤本英子 褒め合う、私もさきほどもやりまして、まず見てください、見てそして少ししゃべってみてください。私はこう感じたというのを。そうするとディスカッションになってその次の行動が起こってくる。そうすると町が変わっていくと思えます。

認識の違いということも面白いですね、意識ね。やはり経験してきたものの違いということもあるかもしれないですね。

○土田昌平 物を違うふうに見てみる、見立てて見るみたいな見方というのが、何か、どんどん人口も減って、物も余ってくるときに、どうしても要るのかなというのをすごく感じました。

○藤本英子 私も今20ぐらいの自治体に関わってアドバイザーや審議会委員などしているんですが、やはりその地域のことをすごく大事にする視点を忘れないでおこうと思っています。

実は姫路の景観に関わらせていただいて、広告のことを考えたときに、私の視点では、駅前から見える垂れ幕をなくすとよくなるんじゃないですかと言ったことがあります。

でも、垂れ幕はいるからというお答えが返ってきたときに、あ、そうか、垂れ幕は、大事にされてるんですねと気づいて、一緒に考えましようと言ったことがあります。

その地域によって私は外部から見てここはどうかという常識で、判断してしまうことが多いのですが、地域の思いを大事にしたいなと思っています。

市長にお伺いしたいのですが、地域の大事にしたいものが、市民それぞれにあると思うのですが、その積み重ねで、まちは成り立っているのではないかと思います。この辺りは市としてサポートされているかと思いますが、自慢を入れてお話いただけたらと思います。

○清元秀泰 どちらかというと都市計画や景観とかは、自分も直感なので、あとは都市局の人たちが一生懸命考えてやっているんだらうと思います。ただ、これからのまちづくりを考えたときに、戦後の高度経済成長期に、姫路市の大手前通りの建物も一気に建ってきました。老朽化しているものが一気に大規模改修や建て替えを迎えると思います。そのときに、我々の景観に対する思いや、この町の色彩としてどういう形が良いのかしっかりと施主さんにも分かっていたりする必要があります。

京都が一番厳しい景観条例を持っていて、それぞれの企業のイメージの色ですら制限されています。

姫路も、原色の色よりも白とか、土や岩などですね、それから白壁、屋根に相当する色は強く出しても構わないのですがそれ以外を抑えるようにしています。

そういうところで、我々の思いと施主さんたちの意見が繋がり、違和感なく景観を形成できれば、10年20年の間に、もっと落ち着いた愛されるまちになるのではないかなと思います。

平成の大修理が終わったときに、覆いがパッと取られて、ブルーインパルスが飛んできたときのお城っていうのはもう皆さん、白すぎ城だと言われたと思うんですけど、実は瓦が白くなったのではなくて、瓦を繋いでいる目地の白漆喰が、白かったのが、人間の目は不思議だなと思うんですけども、その瓦と瓦をつないでる白い部分の方が目に強く残って、瓦はより黒くなっていて、今の方がグレーに変わっているんです

よね。

なのに、屋根が黒くなったというふうに印象を持つということは、つまり我々は白という膨張色を中心に、網膜に焼きつけてるんだなと思いました。ですから、10年経って、あまり変わらない景観でいくのであれば、なまこ壁や白漆喰、瓦を少なくとも低層階に意匠し、まち景観に協力していただいているようなところを優先的に応援していくということで、リノベーションであったり、リコンストラクションを助けていけたらなと思います。

姫路城の大修復が五、六十年ごとに来るということも念頭においた上で、例えば、鳥居を一気に朱色に塗ったら前の方がよかったとよく言われますけど、経年変化と、オリジナルの保存ということについては、特に木造は、生きてるんだということを認識した上で、景観に対しても持っていくべきなのかなと思っています。

○藤本英子 ありがとうございます。そうなんですね目地の色、結局白の方が突出が出てきますのでそちらの方が目立ってきたということですね。

いろんな建て替えがあり、しかたないなと思いますが、良いまち並みを作って、これから10年、100年続けたいですよ。先ほど赤いコーンに竹カバーという話がありましたが、これ本当に京都で進んでいて、そういったちょっとしたまちのディテールなどは、市民が参加できる部分だと思うんですね。

今度、門を換えるから、扉を換えるからということでも、周りを見て意識していただくと、変わってくるのではないかなと思います。

姫路城を中心とすると、色々な変化がこれから起こるといえるところかもしれませんが、いかにそれを一緒に納得しながら進めるかというのが大事だと思います。

最後の話題ですが、市民と事業者と行政、

どうやって協働していくかというところ
です。協働という言葉が流行にはなってい
ますし、つつい言ってしまうのですが、実
際にはどうなのでしょう。加藤さんもさ
きほど山梨のご紹介をしてくださいまし
たが、そこでも協働があつてこそ、民間
の方が、やってやろうかなみたいな感じ
になられたのではないかと思うのです
が、いかがでしょう。

協働について何か事例がありましたらご
紹介ください。

○加藤幸枝 私は、自身がその色彩計画
の従事者として、色々な自治体で景観の
届け出を出す立場でもあります。

やはりいろいろ指導を受けることもあ
りますし、地域によっては使えない色があ
つたりということで、いろいろ苦心もす
るんですが、そういう出す側の立場も、
計画する側の立場もわかるし、一方では
アドバイザー、審議会委員もやってま
すので、運用する側の気持ちもわかる
という板挟み状態にあります。

その中で、そういう運用がどう持続し
ていくかということをごく考えている
のですが、やはり誰かの主張、誰かの
意思だけでは、すごく弱いなと思っ
ています。

私はこういう方法論を持っているん
ですけども、私のやってることを理
解して欲しいのではなく、私達が展
開してる方法論を共感してもらうた
めの工夫みたいなことをずっと考
えています。事例としては、西宮市
に、景観相談員という制度があり、
アドバイザーで公共建築物の色につ
いて相談を受けています。ただ私
が応答するだけだと、1回きりにな
ってしまうので、1年間その学校、
特に小中学校の計画はどうあるべ
きかということをご、担当課の方
と議論しながら考えていきました。

2年目からは、一通りいくつかモデル
ができたので、そのモデルをもとに
担当課の方がまず考えてください。
1案だけじゃなく

て、2、3案、考えてください。考
えてもらった案を持って会議をする、
なんなら現地も見て、なぜ、皆
さんが考えた案の中で私はこれが、
いいと思ったのか。こういう点
が、地域に合っていると、この中
学校はこういう形でここが汚れ
やすいから、この色を変えるのは
すごく適してると思うみたいな
理由を全部共有して、その積み
上げを3年ぐらいやっています。

市役所なので、担当の方が入れ替
わっていくのですが、それをちゃん
と記録に残して引き継いでもら
う。実は当初マニュアルを作
ってくださいという依頼だった
んですが、マニュアルを作
っても駄目ですと、都度都
度考えなければいけないので、
みんなで訓練しましょうとい
う方式にしています。

考え方とか、方法論が広ま
っていくようなことを、行政
の方もそうですし、市民の方
ともやっていきたいと思っ
ている次第です。

○藤本英子 ありがとうございます。
素晴らしい事例かと思いま
す。

そういえば吹田のアドバイザ
ー会議で、加藤さんがおられ
て、私がアドバイザーで
いたことを思い出します。
ニュータウンの事例だった
かと思えます。ありがとう
ございます。

土田さんは、地元で行動して
いて行政にこうあつて欲しい
とか、いろいろ思われること
もあると思いますので、その
あたりをお伺いできますか。

○土田昌平 今、駅西エリア、
裏姫路と呼ばれたりする
みたいなのですが、そのエ
リアで、月に1回朝市とい
うのをやり出しました。来
月で2年になります。24
回、そういう活動をやっ
ていくと、なんかこの辺
最近盛り上がってきたよ
ねというような見え方を
されて、そうすると、この
2年で大体13、14ぐ
らいのお店がそこに増
えたんですね。

もともとそこにあつた商
いという風景が

引き継がれていくということが起こっていて、それがすごく自分の中では、デザインではないところから、その風景を作るところに入り込めてるのかなと思います。

もちろん僕だけでやっているわけではなく、運営チームがあるので、そこでみんな商売繁盛しようよという経済原理もそこに下敷きとしてある上で、景観というのをもう一度とらえ直したときに、じゃあこの看板もう少しこうした方がいいよねという話はしやすくなるのではないかなと思います。

なので、町と関わりながら、考えるということが必要かなというのが1つと、先ほどの話で、行政に何かして欲しいというのは基本的にはないです。

まちづくりを行政にやってもらうという時代は終わっていると思っていて、基本的に民間主導で全部やらないといけないと思います。ただ、絶対に伴走して欲しいシーンがあるので、その時にうまく僕らを使って欲しい。逆もそうなんです、パブリックマインドを持ってやっている民間というのを見つけていただいて、逆に僕らも、行政の言語をできるだけ理解しようとするみたいな、そういう歩み寄りがすごく必要になってくるかなと思います。

その先に景観というものが出てくるような気がしていて、と言いながら、デザイン的な景観を少し仕込んでいきたいという思惑はあるんですが、語り方がすごくいろいろあるのかなというふうに思います。

○藤本英子 どうもありがとうございます。パブリックマインドを持っている民間いいキーワードですね。

市長いかがでしょうか。パブリックマインドを持った民間といかに協働していくかというところをお伺いできますか。

○清元秀泰 そうですね、パブリックマインドを持ってる民間と、アントレプレナーな考えを持つ行政の人がいたらいいんですけどね。なかなかそうはいかないところも

あります。ただ、土田さんのように地元のことを大変愛して、この町を元気にしたいと思っておられる方に、色々な寄り添いができる行政というのは理想的ではないかなと思うんです。

ちょうど3日前までスロベニアの首都のリュブリャナという東欧の国にいたんですが、ヨーロッパでも、アールヌーボーやいろんな建築様式が入ってきて町の景観が、雑駁になりかけたときがあります。イギリスのレンガづくりの図書館を行政が立てると言ったときに、その地元の建築家で、地元を愛する人が、そのふるさとの鍾乳石を赤レンガの中に何個も埋め込んでいくという手法で建築されました。今となってみると、それが非常にアクセントになっていて、世界遺産にも選ばれてる街並みになっていて、やはり行政の思いだけでとか、民間が流行りの広告的な、アールヌーボーで作るとかということよりも、みんなで話し合っ、これが100年耐えられる、400年のお城にふさわしい建築様式や建物だということを協議できることが一番大事かなと思います。

実は今回、世界歴史都市問題の中で、ウォカブルをメインにするということで、土田さんのところの朝市の話をしたら、非常に多くのヨーロッパの人たちが興味を持ってくれました。

結局、我々は廃墟を整備してるわけではなく、今を生きてる人たちが活動することが未来へ繋がっていくということを前提に、過去の歴史を受け入れながら、今を快適に、そしてそれが子や孫に繋がるまちづくりというコンセプトをすべての人が忘れないことが大事だと思います。

ですから今回の都市景観賞でも、子供たちの笑顔や楽しそうな声がたくさん聞こえてくるような建物こそが、やはり賞にふさわしいと思いました。

そして、本当に侍の文化があり、将軍が出てきそうな街だからこそ、そういう古典

的な意匠とか庭を持ってるところが、今回選考委員の先生方に選ばれたのかなと思います。我々はこういう賞や、逆に我々が出してきた、いろいろな評価をツアーにできるぐらいの町並みにすることが、次の20年ぐらいの目標かなと思います。

そういう意味では、先ほど申し上げましたように、高度経済成長期には、機能性重視のビルが多くなりましたけれども、ファンクションは残っていて、中身は快適ですが、外見は千姫が出てきそうな町家づくりとかそういったところをもっともっと、民間の建物の改築にも取り入れたときに応援できる、都市景観に対する、我々行政の力が必要なのかなと思っています。

○藤本英子 どうもありがとうございます。最後に力強い支援の言葉をいただいたように思います。

土田さんがおっしゃったように、基本は民間、私たちがやる。でもそれを、こういう方向であればちゃんと支持するよという、言葉をいただいたかと思います。

皆さんが、生きておられるように、町も生きてるんですね。姫路はこれからいろんなことが起こってくることでしょう。

今こそディスカッション、そして次の世界はどういうふうにしたらいいかということ、を地道に皆さんで考えてしゃべっていく必要があるなというふうに思いました。

できていくものはハードですけども、そこに関わる人々の思い、そして、そこを動かす経済力、このソフトの部分が一緒になってこそ、魅力的な姫路になっていくのかなということを今日は改めて思ったところ、です。

そこには、皆さんの姫路に対する愛が必要かと思っています。

私も隣の県に住んでおりますけれども、姫路愛を少しは持っております。

そして、きっと住んでおられる方は隣の県に負けないぞというぐらい、姫路愛をお

持ちなのではないかと思います。次の姫路に期待して、今日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。